



「農の暮らし」(31)
「本業は百姓」自然菓子工房

おおした
欧舌

お菓子作り・販売をしながら、無農薬農業という「半農半菓」の生活を実践をされている大下さんがその生活を始めたきっかけは？



大下 充億(あつお) さん(44 歳)

山口県の原因建設予定地である上関町と同じ熊毛郡である田布施町で、無農薬農業に力を入れながら、誰もが安心して食べることのできるお菓子工房を営む。そんな「半農半菓」の生活をする、大下さんからメッセージをいただきました。

ケニアでの価値観の変化

13年前、ケニアのとある村で、半日農作業をして、半日生業をする、そんなあり方で成り立つ社会に出会いました。

炭焼きが得意な人。ヨーグルトを作るのが上手な人。家を作るのがうまい人。子どもと遊ぶのが好きな人。



尊重される。ゆっくりと流れる時間。そこにはストレスという言葉はない。お金とも効率という言葉とも無縁な社会の中で、誰もが生き生きと喜びの中に暮らしていました。生きるってこんなにシンプルなことだったんだ。生きることはお金を稼ぐことと思い込んでいた僕にとって、それは衝撃的な出会いでした。そこでの暮らしの中で、僕は生まれて初めて「満たされる」という感覚を知ったのです。

帰国後始めた自然との生活

自分の食べるものを自分で作る、まずはそこから始めようと日本に戻りました。だけど日本で暮らすには、やはり最低限のお金はいる。ということで、継いだ家業のケーキ屋をしながらはじめた合間の米作り。皆、僕のことをケーキ屋と思ってたみたいだけど、僕の中ではあくまで「本業百姓、副業ケーキ屋」。



そんな中、出会ったのが高木代表の著書『地球村宣言』でした。ケニアでのボランティア生活の中で、戦争、飢餓、貧困、気候変動、・・・の真っ只中に身を置きながら、それらの問題の根深さに途方に暮れながら帰国してきただけに、目からウロコが落ちたように、一気に、そして何度も読んだのを覚えています。そして出来ることから始めようと、暮らしを見直し、仲間を集め、講演会を開いたりもしました。だけど田舎とはいえ街での暮らしの中で、暮らしを変えていくことも人に伝えることも

正直限界を感じていったのも事実です。もっと自然と一体となった暮らしがしたい。ありたい世界の小さな雛形を、問題を生まない暮らしを、まずは自らが作りたい。そしてそれが出来るんだということを、言葉でなく、姿で示したい。そんな思いが日に日に膨らんでいった頃、隣町の山あいに、1500坪の土地と古い家を150万円で見つけました。

伝わる人になる！

ケニアのあの村で出会った青年のことを思い出しました。そこでは、男は18歳になると、自分で家を建てて独立し、一人前とみなされます。そこにある木と土と草で2ヶ月かけてつくったその家は、簡素だけど美しかった。家ってこれでいいんだ、作るのってこんなに楽しいんだ。



家は買うもの、人生の半分の時間は家を建てるお金をかせぐために頑張らなくちゃいけないと思い込んでいた僕の中で、何かが音を建てて崩れていきました。1年半かけて自分で家を直し、移り住んだのが8年前。水力と太陽光で電気をつくり、薪で暖をとる。働く時間を半分にして空いた時間で、家を作り、食べ物をつくり、子どもたちと遊ぶ。そんな暮らしを「半農半菓」と呼びながら、暮らしてきました。おもしろいもので、伝えることをやめてから、たくさんの人がむこうから訪ねてくるようになり、伝わりだしたのです。百の言葉を並べるよりも、「生きてみせる」ことの力強さを感じています。

広がる“自給”コメ作り

家族や仲間が増えてくるにつれて田んぼも増えて、今では1町歩を超えました。自然農で2反、耕す田んぼが9反、もちろん無農薬。耕すほうは、天ぷら油で機械を動かして使っています。もちろんあくまで自給が基本で、余った分だけ人様にお分けしています。毎年コメ作りを習いに来る人がいて、この13年のあいだに、ここらでも数十人が小さな自給のコメ作りを始めています。



森の中の幼稚園

そして2年前、自宅横の納屋を改装して、森の中の幼稚園「こびとのおうちえん」を開設しました。



19人の子どもたちと毎日、海、川、山で遊ぶ毎日です。園庭は、四千坪の山、川、田畑。水のせせらぎ、虫の声、鳥のさえずり、草の匂い、・・・。
五感を超えてそんな自然を感じながら、火、水、木、石、土を使って、無限に遊びは広がっていきます。おうちえんの一

日は、それぞれが「今したいこと」を言葉にし、みんなでそのことを聴き合って、スタートします。



自分の気持ちが今どこにあるのか、それをしっかりと確認し、表現すること。そのことを批判されたり意見されたりせずしっかりと認めてもらえること。受け入れられるという経験と場の積み重ねの中で、自然に自分や他者のありのままを受け入れることができるようになっていくと思うからです。ここでは大人も子どもも、自分の思いを主体としながらも、他者の思いや社会とどう折り合いをつけていくのか、調和して生きることを日々、体験の中で学んでいっています。そうして、やりたいことに向かい実現していくとき、人は一番成長し、生き生きと輝いていけるのだと思っています。

“あいのまま”を取り戻す

僕自身、ケニアでそんな自分を取り戻した一人。「自分は一体何がしたいのか」もがき苦しんだ10代、20代。他人の評価やしなければならぬことに囲まれて、僕たちは無意識のうちに、ほんとうの自分の気持ちを置き去りにしてしまってるのかもしれない。ケニアではじめて、「自分は自分でいいんだ」と肩の力が抜けました。今、自分自身をありのままに生きていける自分がある。そして、誰でもそう生きれるのだ、と思います。よく「店をやりながら、百姓もやり、幼稚園まで、……、忙しいでしょう？」といわ

れますが、実際はぜんぜんそうでもありません。どんだん、今という時間を味わえるようになってきました。

もちろん一人でやってたら、寝ずにやっても間に合いません。だけ

ど、家族の中で、仲間たちとの中で、いい循環ができてきたのです。役割を分かち合い、収穫も分かち合い、物もお金も分かち合う。

自給とシェアを軸にした、それは新しい形の共同体。自給的な社会に移行するのは、共同体を再構築することだと思っています。お金が紙くずになったとしても、



揺るがず豊かに暮らすにはどうしたらいいか。この13年、そう自身に問いながら模索してきた、自分なりの一つの答えが今ここにあります。これが、僕なりの地球村。毎週のように訪ねてくる人たちと話しながら、日本中に今そんな小さな村が生まれつつあることにワクワクする今日この頃です。

自然菓子工房 欧舌

Tel 0820-52-2038 FAX 0820-52-2538

Mail okashi@oh-shita.com

営業時間 10:00~19:00 定休日:日曜日

〒742-1551 山口県熊毛郡田布施町 874

HP: <http://www.oh-shita.com/>